

## メッセージアウトライン

### 創世記 3:1 ~5 「サタンの誘惑」

[1]「さて、神である主が造られた野の獣のうちで、蛇が一番狡猾であった。蛇は女に言った。『あなたがたは、園のどんな木からも食べてはならない、と神は、ほんとうに言われたのですか。』」

まるでイソップ物語のような話であるが、これは寓話でもなく、何かのたとえを表しているのでもない。神のことばである聖書は事実としてこの箇所を記す。ある種の蛇は非常にカラフルで美しく、蛇はその魅力的な美しさをもって獲物を誘い、また近づくといい。この時の蛇が人のことばを話す能力を持っていたかは賛否両論があるが、この蛇の背後にはサタン(悪魔)がいたことは間違いない。ヨハネの黙示録では人間の歴史を通して神に反抗し、人を誘惑してきたこのサタンを「あの古い蛇」と呼んでいる。→黙示録 12:9,20:2

「サタン」とはヘブル語で「敵対する者」を意味し、「悪魔」はギリシャ語で「ディアボロス(反抗者)」を意味し、聖書ではサタンも悪魔も同じ意味で用いている。ではこのサタンは何者で、いつから存在するようになったのか。創世記 1 章における神の天地創造には記されていないが、神はおそらく創造の早い段階で、神の御座の回りの色々な奉仕ををするために天使(御使い)たちを創造されたと考えられる。ヨブ記 38:4~7 では神が地の基を定めた時、天使たち(明けの星々、神の子たち)がそれを喜んだとあり、神が地の基を定められたのは創造の三日目であり、すでにその時には天使たちは創造されていたと考えられる。ルカ 2:13 では天使たちは「天の軍勢」と呼ばれているので、天の存在する前(天地創造以前)に創造されることはなかった。それゆえ、創造の第一日目か第二日目に創造されたと考えられる。また彼らの存在の目的は「救いの相続者となる人々」に仕えるためであった。→ヘブル 1:14

この天使たちにはいろいろな階級があり、さまざまな主権と力が与えられていた。→エペソ 1:21,6:12 そしてこれらの天使たちのうち最も偉大なのは「明けの明星」と呼ばれる天使であった。

この「明けの明星」に関してはイザヤ 14:12~15 に語られており、それはバビロンの王に関する預言の文脈の中にあるが、そこでなされている宣言は単に地上の王に対するものだけではなく、その背後にある力と悪意に満ちた霊に対するものとなっている。

「明けの明星」はヘブル語では「ヘレル」であるが、それが後にラテン語に翻訳されて「ルシファー」となりサタンと結びつけられることとなった。英語の欽定訳聖書でもこれを採用し、広く英語圏に行き渡り、サタンの代名詞として用いられるようになった。

サタンのさばきに関する同様の預言はエゼキエル 28:11~19 にも記されている。これはツロの王に対するさばきが宣言されている文であるが、そこでは「油そそがれた守護者ケルブ」に対する語りかけとなっている(ヘブル語原文)。ケルブは文脈からもわかるように、力と美に満ちた最高位の天使と考えられている。しかし、このすぐ後、彼は自分の美しさのゆえに高ぶり、自分の知恵を腐らせ(17)、いと高き方のようになろう(イザヤ 14:14)と高ぶり、ついに神にさばかれ、地に

投げ落とされた。このようにして明けの明星は神と神のすべての目的に対する敵対者となったのである。このサタンは超自然的霊力を持ち、人の心に働きかけ罪へと誘惑する者、神を受け入れることを妨げる者、人の罪の告発者、神の働きの破壊者であり、このサタンが蛇を用いてエデンの園で女を誘惑したのである。

蛇が彼女に話しかけたとき、彼女は警戒すべきであった。しかし、彼女はエデンの園で彼女の回りにいる動物たちが自分と同様に人間のことばを話すことができるかと思っていたのかもしれない。そしてサタンは彼女が夫に相談したり、忠告を受けることのないように、彼女がひとりである機会をとらえた。ここでサタンは神が人に命じられたことばを巧妙にゆがめて用いている。「…園のどんな木からも食べてはならないと、神は本当に言われたのですか」。しかし、神が言われたのは、「あなたは、園のどの木からでも思いのまま食べてよい。しかし、善悪の知識の木からは取って食べてはならない。それを取って食べる時、あなたは必ず死ぬ」(2:16~17)であった。

[2-3]「女は蛇に言った。『私たちは、園にある木の実を食べてよいのです。しかし、園の中央にある木の実について、神は、[あなたがたは、それを食べてはならない。それに触れてもいけない。あなたがたが死ぬといけないからだ]と仰せになりました。』」

蛇に対する答えの中で、彼女は神のことばにつけ加えたり、差し引いたりしている。

神「園のどの木からでも思いのまま食べてよい」→女「園にある木の実を食べてよい」神「…それを取って食べてはならない」→女「それを食べてはならない。それに触れてもいけない」 神はこの木の実に触れることは禁じておられない。

彼女は神について、自分たちを制限し、物惜しみする要求の高い方だと思わせられてしまっている。 人が神のことばを差し引きして変えようとする事について聖書は警告している。→申命記 4:2、箴言 30:5~6、黙示録 22:18~19

[4-5]「そこで、蛇は女に言った。『あなたがたは決して死にません。あなたがたがそれを食べるその時、あなたがたの目が開け、あなたがたが神のようになり、善悪を知るようになることを神は知っているのです。』」

サタンは神のことばを否定して、「あなたがたは決して死にません」と断言した。彼は神をうそつき呼ばわりしているのである。

「あなたがたが神のようになり、善悪を知るようになる」これはサタンを破滅に導いた誘惑と同じで(イザヤ 14:13~14)、女にとっても同じように抵抗できない誘惑であった。人が神のことばを否定し始めたり、神のご支配に疑問を持ち始めたりするとき、人は自分を事実上神の位置に置き始めるのである。これこそ狡猾なサタンが初めから狙っていた目的であった。 今日においても、私たち人間に同じような誘惑が繰り返し、繰り返し、いろいろな形でもたらされている。そして、私たちは実にしばしば同じように反応してしまう。ではそうならないためにはどうすればよいのか。このことに対する対処は、サタンに対して女がしなかったこと、すなわち、神のことばにとどまり、堅く信仰に立つことによってサタンに抵抗することである。→エペソ 6:11~18

このことを私たちは深く心に覚え、実践していく必要がある。